2018年７月16日発行　No.77

＜今週の聖句＞

『そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。』　（マルコによる福音書　第6章7～9節）

＜附属高校と大学の間の繋がりを確認!!　高校１年生を迎えてオープンキャンパスを開催!!＞

先週水曜日、その前の週の大雨とはうって変わって**清々しく晴れ上がったKIUキャンパスに元気な高校生の姿**が多く見られました。**附属高校の１年生約250名を迎えてオープンキャンパスが行われたのです!!**　４月の入学式では、まだ中学生のあどけなさが残っているように感じられた１年生でしたが、この３ヶ月で随分と高校生らしい表情に成長、この日は**いつもと違う大学のキャンパスで与えられる多くの出会いや刺激に目を輝かせて**いました。

附属高校の生徒さんたちを迎えて感じるのは**「個性の豊かさ」**です。がっしりした体格で頭髪を短く刈り上げた、いかにも体育会系のオーラ全開の男子生徒（当然挨拶は「ちわっす!!」でした(^o^)ゞ汗）から、メガネの奥に鋭い輝きを秘める特進クラスの生徒まで、特に今年度からは女子生徒を迎えて共学化がスタートした事で、**その多様性の幅が更に広がった**ように感じられました。どの学校も少子化の問題を抱える時代、**「高・大の連携」は法人の可能性を拓く大切な鍵となっているように感じます。この課題に答えるため、これからも附属生が目指したくなるような国際大学としての魅力を創出して行かねば…と思わされました!!**　(^o^)/" ﾏｯﾃﾏｰｽ

チャペルの空気を体感する生徒たち

一人ひとり違う個性が光る附属生

大学の昼礼拝の多様性をアピール

＜大切な場所に赴く為の事前学習会を開催!!　ヒロシマ平和旅考2018の準備が進行中!!＞

７月も早半ばを過ぎ、夏の暑さが列島を覆っていますが、そのような中で**日毎に強く意識されてくるのが８月４～６日に行われる「ヒロシマ平和旅考」**の存在です!!　先週は参加希望者を対象に**「事前学習会」を開催**しました。**「８・６ヒロシマ」には、平和と命に関わる強いメッセージが存在**しており、73年前の事実や大きな苦しみの中で犠牲となった魂を覚える事は、この企画のタイトル「旅考」の第一歩であるとも言えます。多くの留学生は、**事実を知る事で真剣な表情へと変化**します。国や文化は違っても、**共に世界の平和を求めて学び合える事に大きな意味と深い感謝を覚えています。**

留学生を迎えて映画を観ました

＜先週のメッセージ＞　　※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

７月９日（月）テーマ：「乾いた泥の匂いから見えてくるもの」　野間　光顕（チャプレン）

先週西日本を襲った豪雨災害、私はTVの報道を見ながら、前任校で取り組んだ新潟県三条市の支援活動を思い出した。初めて支援活動に取り組んだ私は、現場の状況が分からず失敗ばかり、泥の中で苦しむ人に寄り添えない自分が本当に恥ずかしく、情けなかった。私はこの時の悲しさや悔しさ、そして乾いた泥の匂いを忘れられない。その後も地震や津波など様々な災害が起こり、その都度支援活動を行ったが、この時の経験や学び、すなわち「現場の状況を確認し、命を最優先にする」そして何より「苦しむ方々の只中におられる主を見出す」事が今の自分の基本になっている。水害の被害の全容はまだ見えない。しかし祈りつつ今できる支援から取り組みたい。

７月10日（火）テーマ：「チームワーク」　　木村　憲幸（キャリア・入試広報室長）

私は学生時代、洋楽（特にハードロックやヘビーメタル）が好きで、大学の時には５人でバンドを組んだ。しかしなかなかメンバーが揃わず、ただの音の寄せ集めのようなパート練習が数ヶ月続いた。ある時、ようやく５人が揃い、演奏ができた時、下手ではあったがチャンと音楽になっており鳥肌ものの感動を覚えた。今、振り返ってみると、大学の卒業前に経験を積めた事の大きさを強く感じる。現在働いている職場でも、独りでやれる仕事等無い事が分かる。上手く行かない時はアドバイスをもらったり、皆、誰かのサポートを受け、また誰かをサポートしながら、チームワークの中で生きている。改めて周りへの感謝を覚えつつ共に歩みたい。

７月11日（水）テーマ：「最優先事項」～その時、あなたを導くもの～　野間　光顕（チャプレン）

先週の西日本豪雨災害、その前の大阪北部地震と大きな災害が連続して起こっている。ある社会学者の分析では「非常事態に直面した時、人間の判断は、様々な情報の影響を受ける。それらを総合的に考慮し、その時に最も有効と思われる行動を選択するが、残念ながらそれが必ずしも安全に結びつくとは限らない。」このような非常事態に直面した時、何を基準にし、どのように物事を判断するのか？「最優先事項」とは何だろうか？　全てに対応するマニュアルは存在しないが、確実に言える事は、その判断基準に「命」が大きく関与している。私たちはこの時代に本当に大切にすべきものを、日々の生活の中で自覚しつつ生活しなければならない。

７月12日（木）ﾃｰﾏ：「神と共にいる安寧とそれが与えられる契機について」　三宅　義和（経済学部）

「放蕩息子」の喩えは有名だが、物語全体を包む「不公平感」に何か腑に落ちない思いを抱く人も多いのではないか？　しかし、世俗的な欲求を満たし尽くした弟（＝悪）に対し、欲求を抑え励んだ兄（＝善）に代表されるこの物語の図式は本当に正しいのだろうか？　兄や弟の発言、心の中にあった願いは人間存在の欲求を示しており、それを受け止めた父親は神を表している。つまり真の幸せは、この世的な欲求を満たす中にあるのではなく、神と共に生きる、そこから来る喜びにあるのではないか？　人が幸せへと導かれる過程は様々だが、その一つひとつに神との接点が用意されている、それを覚え、そこに安心感や安寧を覚えつつ歩みたい。

７月13日（金）テーマ：「イギリスの原発」　　滝本　幸世（経済学部）

ｲｷﾞﾘｽ・ｳｪｰﾙｽﾞにある小さな島に２機の原発が日本企業の援助で建設が予定されている。以前住んでいた福島で原発事故が起こり、その事態がまだ収束していないのに海外に原発を売り歩く事に私は大きな疑問を感じる。除染・廃炉作業者が被曝し、子供が甲状腺ガンになり、多くの人々が故郷を失っている。それで良いのか？全世界が脱原発ｸﾘｰﾝｴﾈﾙｷﾞｰの方向に向かう今、生活に対する意識の変革が問われている。次の世代のためにより良い状態の地球を残していく事、それが現代を生きる私たちの使命であると思う。　　（文責：野間 光顕）